



令和3年度

地域経済産業活性化対策費補助金

(被災12市町村における地域のつながり支援事業)

取組事例集

はじめに

本事業は、福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム）の個別訪問活動を経て集められた被災地域の声や要望を基に、経済産業省で平成28年度に設けられた事業です。

東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い避難指示等の対象となった福島県田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楢葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村及び飯舘村における被災者の人々とのつながり創出を通じ、地域の活性化、さらには産業復興や、まちづくりにも資するような取組を支援することを目的とし、令和3年度「地域経済産業活性化対策費補助金(被災12市町村における地域のつながり支援事業)」を実施しています。

震災から11年目を迎えた被災地域で帰還された皆様が、復興やまちづくりに熱い想いを持って取り組んでおり、着実に地域社会の再生に向けて歩みを進めておられます。そして、避難先においても被災者の皆様が互いに協力しながら新たなコミュニティ作りに取り組まれておられます。

この2年、社会情勢が不安定な中でも、地域の自治体や関係団体との協力のもとに令和3年度に取組を行った皆様の一例を、この事例集にまとめさせていただきました。福島県や被災地域のみならず、全国の皆様方にこれらの取組による復興への歩みにご理解を深めていただくとともに、被災された皆様が今後これらの取組を参考に、新たな人々のつながり創出や、さらなるコミュニティ再生へ向けて活動していくための一助となれば幸いです。

最後に、この事例集の作成にあたり、取材や資料のご提供などにご協力いただきました各取組団体の皆様をはじめ多くの関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

令和4年3月

株式会社ジェイアール東日本企画

令和3年度 地域経済産業活性化対策費補助金
(被災12市町村における地域のつながり支援事業)事務局

目 次

被災 12 市町村における地域のつながり支援事業 事例紹介

01	都路色に染めるコミュニティ創出事業 (対象者:田村市／実施地:田村市)	2
02	美大生と学ぶ! グラフィックレコーディング教室 (対象者:田村市／実施地:田村市)	3
03	表現から地域がつながるアートワークショップ (対象者:南相馬市／実施地:南相馬市)	4
04	ワークショップ&ステージイベント～南相馬と杉並の子供たちによる交流 10年の軌跡～ (対象者:南相馬市／実施地:南相馬市)	5
05	親子陶芸教室 (対象者:楢葉町／実施地:楢葉町)	6
06	楢葉町活性化戦略事業 (対象者:楢葉町／実施地:楢葉町)	7
07	富岡町つつじ再生プロジェクト (対象者:富岡町／実施地:富岡町)	8
08	ピクニックシネマプロジェクト (対象者:浪江町／実施地:浪江町)	9
09	なみえ・こども雪祭り (対象者:浪江町／実施地:浪江町)	10
10	きめこみサークル (対象者:浪江町／実施地:いわき市)	11
11	葛尾村での祝言式を通したコミュニティ再生事業 (対象者:葛尾村／実施地:葛尾村)	12
12	飯館村産の牛肉及び豚肉と野菜を使った創作料理教室と音(文)楽を通した飯 館の魅力(宝)さがし (対象者:飯館村／実施地:飯館村)	13
13	「アートフラワー教室」 (対象者:楢葉町・富岡町・双葉町・大熊町・浪江町／実施地:埼玉県)	14

※掲載している取組については、費用の一部を自己負担している場合があります。



取組 団体

都路おりをり愛好会

代表者 今泉 富代さん

取組 名称

都路色に染めるコミュニティ創出事業

取組の概要

田村市では震災の影響によって、都路町を中心に生活することが困難となり、それまで存在していた地域コミュニティが希薄化しました。これによって、世代間の交流や伝統文化などが失われています。そこで、生産者の協力を仰ぎながら染物や織物を体験する地域住民の交流の場を作りました。ともに制作を行うことによって稀薄化したコミュニティを再構築し、学びや発見を通したつながり創出の強化を図りました。

■取組の様子

地域住民の交流機会の創出と新たな地域文化の創成を目指して、地元生産者の協力の下、染物と織物の体験ワークショップを開催しました。令和3年の8月と9月には「初夏の藍染」「ホップ染め」体験として、染料の摘み取りから染めまでを、田村市産の農作物を使って行いました。10月の「織物」体験では機織り機を使用して、ウールマフラーを織るワークショップを実施し、全2回で織り上げました。

11月には、「作品展」を開催しました。初日には、講師の方に田村市の織物や染め物の歴史と文化についてお話しいただきました。また、実際に機織り機で織物も披露していただきました。展覧会の中では、一般のお客様や見学に来ていた地元の小学生にも、作品を手に取ってもらい、特に興味・関心の高かった蚕の繭から糸をとるワークショップも行いました。この他に織り機を使ったさき織り体験も行いました。

幅広い年代の方が体験や見学をし、染物や織物、絹(蚕)を通して、学びやコミュニケーションを取ることができました。今後も、このような体験会を継続して開催していきます。

■実施者の声

ワークショップと展覧会ともに、小学生から高齢者までの幅広い世代の方に参加していただきました。参加された方々が、楽しんで染め物や織物を作り触れる姿や、小学生が興味深い表情で説明を聞く姿などを見て、取組にやりがいを感じることができました。

今後もこのような体験会を積極的に開催し、住民の絆を深める取組を継続することで、さらに地域の活性化を図っていきます。

■参加者の声

「染め物や織物を初めて体験しました。どの作業もとても楽しく集中して行うことができました。今後もぜひ継続して作品づくりを行っていきたいと思いました」「久しぶりにいろいろな方々と交流できてうれしかったです」「蚕から洋服ができることにびっくりしました」





取組団体

都路町グラフィックレコーディング勉強会

代表者 石橋 黛子さん

取組名称

美大生と学ぶ！グラフィックレコーディング教室

取組の概要

震災以降不安な日々が続く中でこそ、日常に当たり前にあるものを楽しむための、多角的な視点を身につける場が必要だと考え、グラフィックレコーディングのワークショップを開催しました。グラフィックレコーディングの手法を身につけることを通して、地域の小中学生が共に学び合うことを目的に行いました。自己表現の手法を身につけ、発表の機会を設けることによって、他者との理解を深める機会としました。

■取組の様子

今回のワークショップでは、「よりあい処 華」にて、近隣地域の小・中学生とその親を対象に紙とペンを用いて気軽に始められる、グラフィックレコーディングを行いました。

具体的には、水性マーカーペンを使用し、紙にアイデアを書き出す練習をしたり、田村市内のマップをアイコンを交えながら描きました。完成した作品についてひとりひとり発表を行いました。最初は、参加者も少し緊張した雰囲気でしたが、徐々に打ち解けていき、初対面だった人たちも会話を活発に交わすなど、和やかな雰囲気で行うことができました。普段なかなか学ぶ機会の少ない、グラフィックレコーディングという手法を身につけることで、日常を実りあるものへと変え、将来の選択肢の幅を広げることできました。今後も、住民の方々が知識を共有する場やつながりの機会を生み出す取組を継続していきます。

■実施者の声

参加者は日頃、絵や図を用いた表現を学ぶ機会がなかなかないということで、大変興味を持っていただきました。また参加したいという方も多く、今後もこの取組を続けて行きたいと考えています。課題は、ワークショップの内容が小学生にとっては少し難しく、設定した時間が充分でなかった点です。今後はプログラムに工夫が必要だと考えています。次年度以降は、学生や大人向けのプログラムも検討し、さらに多くの参加者が表現を学び、交流を交わせるような機会を作っていくます。

■参加者の声

「手紙などを書くときに、少しでも絵があると楽しくて分かりやすいことが理解できました」「マークを描く時のコツが分かりました」「大人も楽しめました。自己紹介でイラストを活用する方法は個性が分かってよかったです」「人には色々な考え方やイラストがあるのでと思いました」





取組団体 粒ズ

代表者 西山 里佳さん

取組名称

表現から地域がつながるアートワークショップ

取組の概要

南相馬市小高区は避難指示解除から5年間で600人ほど移住者が増えています。そこで、地域住民と移住者の接点を作り、アートや表現を通して交流を深めることを目的に、立体ペイントワークショップを実施。趣味や創作活動を通した交流の場を作ることと、デザイン・アートに関心がある関係人口の創出を目指しました。オリジナルの作品を作り、参加者同士の鑑賞会を実施し、後日開催した展示会で一般の方にも作品をお披露目しました。

実施者の声

ワークショップの参加者と鑑賞者がそれぞれの年齢や肩書きを超えて、自分の想いを表現し交流する機会を作ることができました。創作だけでなく、互いに作品を鑑賞し合うことで、表現を通した新たなつながりや、気づきが生まれることを実施者としても実感することができました。今後も、県内外の方々がさまざまなアートや表現に触れる機会を作り、誰もが表現者になれるイベントを企画し、交流人口の創出と住民の交流機会を増やしていきます。

参加者の声

「他の人の表現を見て、『いいな』と思ったところを自分の作品に取り入れてみました。誰かと一緒に作ることで、表現の相乗効果が生まれるのが楽しかったです。」「作り手の皆さんのが個性溢れる素敵な作品ばかりでした。次回はぜひ自分でも作品を作ってみたいです。」

取組の様子

令和3年5月にオープンした、南相馬市小高区にあるアトリエギャラリー、コワーキング、イベントスペースの運営を行う「表現からつながる家『粒粒』」は、地域住民と移住者が気軽に接点を持つことができる場です。

本取組ではこの場所を活用し、アート作品づくりのワークショップとワークショップで制作した作品の展示会を行いました。講師には、テキスタイルデザイナー・イラストレーターとして働きながら、アーティストとしても活躍するsuper-KIKIを迎え、「粒粒」のロゴキャラクターである“つぶくん”をそれぞれ好きな色に装飾し、個性溢れる“つぶ”を創作しました。また、後日展示会も開催し、近隣住民の方にも作品を鑑賞していただき、アートや表現に触れてもらう機会を設けました。

ワークショップと展示会には、県内外に避難されている方や近隣に住んでいる方など、子供から高齢者まで約80名の方々が参加しました。ワークショップの参加者は作品づくりを通して自分の想いを表現し、鑑賞された方々は作品から新たな気づきを得るなど、それこれがアートにおける「表現」を楽しみました。



取組
団体

南相馬&杉並トモダチプロジェクト

代表者 狩野 菜穂さん

取組
名 称

ワークショップ&ステージイベント ～南相馬と杉並の子どもたちによる交流 10年の軌跡～

取組の概要

震災以降、南相馬市と災害相互援助協定を結ぶ東京都杉並区の子どもたちが、歌とダンスのレッスンを重ね、交流する活動を続けてきました。しかし、新型コロナウイルスの影響で交流の機会が失われています。そこで、南相馬市の野馬追通り銘醸館の一室を借りて、写真展を開催しました。老若男女、地域を問わずにさまざま方に震災後10年の軌跡を見て感じて頂きました。合わせてダンスワークショップなどのイベントも開催しました。

取組の様子

これまで、南相馬市と杉並区の子どもたちは、歌とダンスを通じて交流を続けてきました。さまざまなオリジナルソングを作り、合宿やダンスレッスンを共に行うなど、南相馬市の方々の気持ちに寄り添いながら、活動を続けてきました。

この取組では、これまでの活動の軌跡を一堂に会し、写真展という形で南相馬市の皆さんに披露しました。当日は、南相馬&杉並トモダチプロジェクトの交流事業を知っている方はもちろん、知らない方にも来場していただくことができました。子供から高齢者まで幅広い年代の方に展示を楽しんでいただくことができました。

新型コロナウイルスの影響で思うように活動を進められず、以前よりは交流の機会が減っていますが、写真によって活動を知っていただくことによって、再び南相馬市と杉並区の皆さんをつなぐことができました。また、南相馬市以外の相双地域との交流を醸成する機会となり、新たなつながりを生むこともできました。参加された方々は終始笑顔で、和気あいあいとした雰囲気の中で行うことができました。

実施者の声

新型コロナウイルスの影響で、当初予定していた音楽劇とダンスイベントは中止となりましたが、取組の意義や子どもたちの想いは地元の方々に伝わったと考えています。写真展においても、地域や年齢、性別を越えたコミュニティを再構築することができました。今後も、工夫をしながら南相馬&杉並トモダチプロジェクトの活動を継続し、延期となっている音楽劇の本公演とダンスイベントの開催を実現したいです。地域の方々とともに双相地域の元気な姿をこれからも発信していきたいと考えています。

参加者の声

「これまでの10年分のイベントや取組を動画や写真として一覧することができました」「子供や大人が、地域を問わずに楽しんでいる様子を見ることができました」「どの展示からも楽しそうで嬉しそうな様子を見ることができ、こちらも嬉しく思いました」





取組団体

檜葉町陶芸愛好会

代表者 佐藤 久米一さん

取組名称

親子陶芸教室

取組の概要

震災以降、落ち着かない日々を過ごしている若い子育て世代のために、親子で一緒に同じものを作る時間を提供し、親子間の愛情を深めてほしいという想いで取組を企画しました。対象者は認定こども園の園児と町立小中学校に通う児童生徒の親子です。教室では作陶を通じて祖父母世代との交流を図ることもできました。2回に分けて制作を行い、本焼成を経た一週間後に作品を手渡しました。

取組の様子

檜葉町子育て支援センターで7月と8月の2回にわたり、檜葉町陶芸愛好会による親子陶芸教室を開催。町内の親子12組が参加しました。親子で制作を楽しむ姿や、子供から離れて保護者が制作に集中して取り組む姿が見られました。参加した親子が心身ともにリフレッシュする良い機会を創出することができました。愛好会のメンバーは参加者の祖父母世代に当たります。地域で暮らす三世代が制作を通して交流する場になりました。

制作の1回目は粘土でかたち作り、2回目に素焼きした作品に釉薬をかけたり、絵付けを行いました。その後事務局で本焼きし、約1週間後に参加者に完成した作品を渡しました。

こども園の園児たちの陶芸教室は参加者が30名に及びましたが、職員の方々に準備を手伝っていただき、スムーズに実施することができました。また、小中学生の陶芸教室は新型コロナウイルスの感染予防のため、1回あたり5組と少人数でしたが、和気あいあいとした雰囲気の中で実施することができました。更に、開催中に地元のラジオ局による取材もあり、大変盛り上がりました。

実施者の声

当日は親子で童心に返って夢中で粘土を捏ねる様子を見ることができました。今では日常の中で泥遊びのような体験をする機会が減っています。手を使って粘土を捏ね、作品を作ることで、多くの方が震災や新型コロナウイルスの影響による閉塞的な気分から解放された様子を見ることができました。また、参加者は20代、30代の保護者とその子供が中心であったため、世代を越えた交流を行うことができました。取組による多世代との交流は、実施者としても貴重な経験となりました。

参加者の声

「講師の先生やスタッフの方の丁寧な指導の下、土の感触や色付けを楽しみました。完成の喜びもひとしおです」「子供にとっては、普段の粘土遊びの延長という感覚。のびのびと土をこねていました」「自分で釣った魚を自分で料理し、自分で作った皿で食べる経験はクセになりそうです」



**取組
団体****一般社団法人ならはみらい**
代表者 渡邊 清さん**取組
名称****檜葉町活性化戦略事業****取組の概要**

本団体は震災によって活動を休止・縮小した地域団体や、震災後に設立された団体が連携・協働を図ることで一体感を持った事業展開を行い、相乗効果を生むことを目的に設立されました。町の発展に向け、町民による活動の活性化や交流人口の拡大、ふるさととのきずなの継続のための横断的な取組を行っています。

本年度は、1)企画検討委員会の開催
2)ならはお役立ちカレンダーの製作・発行
3)ならは散策マップの製作・発行 4)防災教室の開催を実施しました。

■取組の様子

企画検討委員会の取組では、協議会参加団体の管理施設のいずれかに、毎月1回、各参加団体から1名程度が集まって、全体の情報共有やならはお役立ちカレンダー、ならはお散歩マップ、防災教室の実施に向けての検討を行いました。毎回グループディスカッションなどを取り入れ、出席している各人が積極的に意見を出しやすい雰囲気づくりを心掛けました。

カレンダーは各協議会を越えた、地域の方に有益な情報を整理し毎月発行しました。マップも新しい施設や情報の追加を行い、それぞれが持っている情報を明示し、地域の方の交流やにぎわいの創出に貢献できるものを作成しました。

防災教室は当団体の管理施設である「みんなの交流館 ならはCANvas」で1月に実施しました。檜葉町社会福祉協議会・地域包括支援センターからの紹介による日本赤十字社福島県支部と再生可能エネルギー事業を行っている町内の企業から講師を招き、災害時の救急法セミナーと、リリーフエナジー（折り畳みソーラーパネル充電キット）の使用教室を開催しました。当日は、通常の企画検討委員会以上に多くの参加者があったことで、さまざまな方々が交流する機会を創出することができました。

■実施者の声

町内組織間の横断的な連携体制を構築・強化することができ、協働に向けた機運を醸成することができました。所属団体それぞれの分野・視点からの情報共有により多角的に町の現状を捉え、多様な町民を巻き込んだ各団体の取組を展開するきっかけづくりができました。

今後は各団体が参加に意義を感じるよう、有益な講習会の開催や各団体での困りごと・質問・応援依頼などのヒアリングと団体同士での課題解決支援などを積極的に行っていきます。

■参加者の声

「イベント開催などのお知らせや集客したいことがある場合、各団体での社内共有や、チラシ配布をしていただくなど、多くの人に情報を広める機会として活用しています」「さまざまなジャンルの団体が定期的に集まる、このような機会は町の活性化のために、あって良いと思います」





取組団体

特定非営利活動法人元気になろう福島

代表者 本田 紀生さん

取組名称

富岡町つつじ再生プロジェクト

取組の概要

富岡町の町花でもあり、町民に広く愛されているつつじの再生を通して、町内の復興と地域の活性化、そして地域コミュニティ形成を目的として企画しました。須賀川市の大桑原つつじ園の協力のもと、町内で剪定したつつじの挿し木苗を希望する町民（つつじの里親）に配布。町民が育成し、将来的に町への植栽を行います。町民が主体的、継続的にまちづくりへ参画する環境を整え、つつじの再生が富岡町の復興の一助となる取組です。

取組の様子

取組の2年目となる今年度は、大きく分けて2つの取組に力を入れました。一つ目は「つつじの里親による挿し木苗の育成」です。新規参画した町民も含め、現在32名の里親によって挿し木苗の育成に取り組んでいます。大桑原つつじ園による年3回のワークショップで管理方法や肥料散布・植替え方法などの指導をいただきました。今年度は時季を鑑み、相談窓口の設置や里親同士の思いを共有できる広報物を配布することによって、非接触でも、つつじを通したつながりを作ることができました。

二つ目は「町内の植栽に向けた準備」です。育成した挿し木苗を令和4年度末に富岡町内へ植栽することを目標にしているため、具体的な植栽に向け、富岡町役場やとみおかプラス、大桑原つつじ園との協議を重ね、植栽先候補地の検討や植栽後の管理・利活用について準備を進めました。

今後、候補地が具体化した際には、里親を中心に地域のみなさんの声を聞きながら植栽場所を最終決定し、多くの人に愛されるつつじの再生に向けて取り組みます。

実施者の声

今年度は新型コロナウイルスの影響で、対面での交流に制限がありました。しかし、「つつじ」という共通のツールによって、参加者ひとりひとりに対する意識の醸成と、参加者同士のつながりを形成することができました。

次年度は町内への植栽を予定しており、協力団体との連携を密にして、アイディアを出し合いながら効果的な取組となるよう進めていきます。また、ここまで丁寧に取り組んできた里親のコミュニティについても、町のサークル活動や生涯教育の一環として継続・発展させ、帰還が進む富岡町の地域コミュニティ活性に貢献していきます。

参加者の声

「故郷の復興を願う気持ちが増しました。」「つつじの成長が嬉しく、ふるさとにつながっていると感じています。」「つつじを育てることで成長する姿に癒され、張り合いが出てきました。地域にも微力ながら貢献でき、自分の為にもなるので今後も継続ていきたいです。」



取組
団体

なみえコミュニティシネマ実行委員会

代表者 岸本 あすかさん

取組
名称

ピクニックシネマプロジェクト

取組の概要

浪江町では震災から11年経った現在でも未だに多くの方が避難を続けており、帰還率は1割未満です。元々地域に根付いていたコミュニティは失われ、帰還町民と移住者が交流する機会もほとんどありません。そこで、この取組では、誰もが気軽に集える場を提供することによる、世代を超えたつながりの創出や地域の活性化、交流人口の拡大を目指し、町内での野外上映会「ピクニックシネマ」を開催しました。

取組の様子

浪江町の復興のシンボルとして開業した「道の駅なみえ」の駅舎裏側に、大型スクリーンを設置し、「クリード チャンプを継ぐ男(吹替版)」を上映しました。集客はSNSや地元の新聞などで周知を図り、10代未満から70代までの約100名が参加。参加者の約半数は、浪江町在住・在勤の方や浪江町出身の方でした。

会場はピクニック気分で映画を鑑賞してもらえるよう、芝生の観客エリアを用意。参加者はシートなどを敷き、思い思いに映画を楽しんでいました。また、飲食や物販ブースでは参加者同士の交流が促進されました。上映作品は「世代を超えた絆」をテーマに、高齢者と若者が支え合いながら、共に困難に立ち向かう姿を描いた作品を選定し、浪江町で実現したいメッセージを込めました。

会場の設営・撤去、当日の受付や進行、誘導などの運営業務は、町民にボランティア参加を呼びかけて、主体的にイベントに携わってもらい、協力して取り組むことができました。上映会の翌朝には、上映会場周辺のごみ拾いを参加者で実施。映画の感想を共有し合いながら交流を図りました。

実施者の声

新型コロナウイルスや台風の影響で直前まで不安でしたが、無事に開催することができました。初めての挑戦でしたが、町内外から約100名の方が参加してくださいました。参加された方からは温かいコメントや感想を多くいただき、今回の取組の意義や伝えたいメッセージは参加者の方に伝わったと実感しています。

今後も、浪江町でこうした取組を継続して行い、町の新たなイベントとして定着させるとともに、さまざまな世代の交流機会を増やし、地域の活性化に貢献していきます。

参加者の声

「“今の浪江町”と重なる部分があり、自分たちで浪江町を創っていくことの大切さ、そのエネルギーを映画からもらいました」「大きいスクリーンで大勢の方と同じ空間で感動を味わえました」「コロナ禍でなかなか楽しむ機会がなかったので、取組をぜひ継続してほしいです」





取組団体

ringo company

代表者 榊 裕美さん

取組名称

なみえ・こども雪祭り

取組の概要

浪江町は未だに残る震災の影響や新型コロナウイルスによって、県外への往来が難しい状況です。そのため、子供たちが出会える大人や体験はごく限られたものになっています。そこで、町内で暮らす子供たちの新たな好奇心や憧れを生むことで将来の選択肢を広げるべく、多様な大人たちとの出会いや心に残る特別な体験を企画。スノーボーダーや大学生と交流しながら真夏に雪遊びができるイベントを実施しました。

■取組の様子

「道の駅なみえ」を会場に、人工降雪機を使って雪山をつくり出し、ソリあそびや雪板と呼ばれるスノーボードのような遊具を体験できるイベントを行いました。イベント当日は大学生やプロのスノーボーダーが終日ブースに控え、子供たちとの交流や雪板の指導を行いました。

会場では浪江町の子供だけではなく、「道の駅なみえ」に立ち寄った子供たちも季節外れの雪に興味を抱き、仲良く遊んでいました。

福島県の中でもめったに雪が降らない浪江町では、初めて雪に触れる子供も多くいます。子供たちは、おそるおそる雪に触れては溶けていく様子を楽しんでいました。また一緒に訪れた家族も参加し、子供たちと一緒に暖かい雰囲気で行うことができました。

■実施者の声

参加したほとんどの子供が、生きて初めて雪板に乗りました。スノーボーダーにレクチャーを受けながら熱中して何度もトライしていました。福島県の浜通りはサーフィンの聖地とも呼ばれ、震災前には多くのサーファーが訪れていました。雪板を通してサーフィンと同じ「横乗り」を体験した子供たちが、スノーボードやサーフィンへの興味を抱き、いずれ福島の海や雪山に飛び出しきれることを願っています。

■参加者の声

「冬になったら、今度はスノーボードにもチャレンジしてみたいと思いました」「雪板を練習するうちにだんだん上手に滑れるようになって楽しかったです」「子供に雪遊びをさせたことがなかったので、初めて雪に触れるとてもいい機会をいただきました」



取組
団体

きめこみサークル

代表者 松本 祐子さん

取組
名称

きめこみサークル

取組の概要

これまで浪江町にあったコミュニティは震災によって消失し、避難先では交流もなく心細い日々を送っていました。しかし、なみえ交流館の開館をきっかけに、地域コミュニティの再生ができるかと考え、誰にでも簡単に作品を作ることができる、きめこみパッチワーク教室の開催を企画しました。作品づくりで町民が集まることによって、生きがいが生まれ、絆を深める取組となっています。

■取組の様子

きめこみパッチワークは、木綿やちりめんをさまざまに切り取り、四季折々の花や風景、動物などの画材に、目打ちを使ってきめ込んでいきます。月2回「なみえ交流館」に集まり、講師の指導のもと制作を行いました。制作後はお互いに作品を見せ合い、感想を言うことで、さらに技術の向上に励みました。

参加者は60代以上の女性を中心になっています。教室では作業を行いながら、日々のことを中心にさまざまな情報交換が行われています。教室を開催することで、町民同士の交流が盛んになり、震災前のように町民同士の絆を深めることができるようになりました。この取組を行うことで、被災者の心の支えや避難地域での疎外感の軽減にもつながっています。

また、今年度は新型コロナウイルスの影響を受けながらも、「道の駅なみえ」できめこみ作品の展示会を開催することができました。会場には町民を中心に多くの方が足を運んでいただきました。教室の参加者は今までにやってきたことに自信をもつことでき、充実した展示会を行うことができました。

■実施者の声

新型コロナウイルスの影響もあり気持ちがふさぐこともありましたが、仲間との作品づくりはそうした日々の中でも励みとなりました。展示会では来場された多くの方に褒めて、いたくことができ、きめこみパッチワークの魅力を話すことで交流を深めることもできました。作品を誰かに届けたいという思いや仲間との活動で笑顔になること、交流の機会が増えることはフレイル予防の一助にもなると考えており、町民のために、今後も積極的にこの活動に取り組んでいきます。

■参加者の声

「作品づくりの楽しさと、仲間とのふれあいによって生きがいを見つけることがで、毎回休まずに参加しています」「難易度の高い作品にも挑戦できるようになりました。手先を使った細かい作業は“老化の予防”にもなると感じながら、毎回楽しく参加しています」





取組団体

かづろうさんげ祝言式実行委員会

代表者 下枝 浩徳さん

取組名称

葛尾村での祝言式を通したコミュニティ再生事業

取組の概要

双葉郡葛尾村は平成26年の6月に一部地域を残して避難解除が行われました。避難により人口が極端に減少し、これまであった隣近所の協力体制やそのコミュニティは大きく失われました。この状況を改善するために、村民同士が新たなコミュニティを作ることが必要だと考え、隣近所の協力体制を再び構築し、村民の方たちのつながりを再生することを目的として葛尾の伝統文化である「祝言式」を再現し、実施しました。

■取組の様子

令和4年1月に、村内の落合集会所を利用して、葛尾村の伝統的な祝言式イベントを開催しました。参加者は、葛尾村へ帰還した村民と現在は三春町に在住している村民合わせて25名と檜葉町、田村市、福島市、郡山市からの交流層、約20名です。

当日は、「餅つき」「三々九度」「懇親会」「鏡開き」を行い、村民の方々が「長持ち唄」を披露しました。見学の参加者は女性が多く、新郎新婦役となつたお二人の着物姿に感動する姿や、今回、住民の方々が再現した昔ながらの祝のお膳に目を見張る姿がありました。温かみのある家族のような雰囲気の中取組を行うことができました。

「かづろうさんげ」とは「かつらおさんの家」という意味です。村全体をひとつの家族に見立てながら、村外の人とも親戚のような絆でつながるネットワークです。祝言式は昔から集落ごとに行われおり、高齢の方にも昔を懐かしみながら参加していただけました。福島大学の学生も運営スタッフとして加わり、村民との新たな交流の機会となりました。葛尾村の伝統を周知することで、地域や年代を超えた新たなつながりとコミュニティへの愛着を創出することができました。

■実施者の声

村外の参加者にも葛尾村の文化を周知し、葛尾の家族の一員のような感覚を持ってもらうことができました。祝言式までの期間を通して、村民同士のつながりをつくることができたと考えています。さまざまな地区的村民同士が交流する機会を増やすことが、新たなコミュニティ構築の一助となりました。今後は、現代の結婚式の要素を取り入れ、村の人には懐かしい記憶を思い出していただく機会に、村外の方には葛尾村の記憶を知って頂く機会を作っていくます。

■参加者の声

「楽しみながら祝言式に参加できて嬉しかったです。是非また参加したいです」「昔ながらの婚礼衣装やしつらえがとても印象的でした」「素敵な時間を皆さんと過ごすことができました」「親族固めの盃では、参加者全員が家族になったようで素敵でした」「次回は昔行っていた花嫁道中をやって欲しいです」





取組団体

いいたての宝さがしをしよう会

代表者 菅野 クニさん

取組名称

飯館村産の牛肉及び豚肉と野菜を使った創作料理教室と音（文）楽を通した飯館の魅力（宝）さがし

取組の概要

飯館村は現在も避難されている方が多く、コミュニティの再生が難しい状況にあります。そこで、飯館村で育てられた和牛と村内に牧場のある豚、村内で栽培された野菜を使った創作料理教室を開催し、食の豊かさに気付くこと（宝さがし）と食から村民の健康を守る取組を行いました。また、飯館村未来つ子基金に寄付を行っている岡山県の朗読グループと村民がつながりをもち、飯館村の魅力を発信しました。

取組の様子

令和3年10月に実施した創作料理教室は、飯館村で肥育された牛肉と飯館産野菜を使用し、飯館村の宿泊体験館の野外テラスで、キッチンカーを使用して行いました。

講師はテレビの料理教室や、県内の道の駅のメニュー監修などで活躍されている方に依頼し、村内の素材を生かした料理を学ぶことができました。11月には、飯館村交流センターで、飯館産野菜と飯館村内の豚肉を使った薬膳料理教室を開催しました。今回は以前から飯館村との交流があり、震災以降も何度も村に足を運んで復興に貢献してきた韓国料理店の方に講師を依頼しました。参加者は、飯館村広報紙と村内家庭にチラシ配布を行い募集。参加者は積極的に調理に取組、終始和やかな雰囲気で会を楽しんでいました。

料理教室の後は、岡山県内で活躍しているフリーアナウンサーで構成された朗読グループによる絵本の朗読会を行いました。ピアノの演奏をBGMに、飯館村の全村避難の様子を絵本にした「がんばっぺまでいな村」などが朗読されました。村民が取組を通してつながりを深めるとともに、県外の方との貴重な交流の機会となりました。

実施者の声

飯館村で飼育された牛や豚のおいしさを村外の方にも広く伝えて行きたいと思っています。そのため取組を通じて、飯館産の野菜が持つ味や香りなどを生かした創作料理のメニューが村内で提供できるようになればと考えています。今後も創作料理教室を進化させ、飯館村の食材の良さを県内外にアピールし、開発メニューが飯館村内で食してもらえるようになってほしいです。県内外の飯館村応援団との交流もさらに深めていきます。

参加者の声

「ナツハゼのおにぎりは色がきれいで簡単。家でも作ってみます」「野菜は捨てるところがなく、デトックススープは無塩でも美味。素材の力に感動しました」「ピアノのBGMの中、プロによる絵本の朗読で聴く全村避難の様子に、当時の様子を思いだし頑張る力が湧いてきました」





取組 団体

さいがい・つながりカフェ実行委員会

代表者 渡部 まゆみさん

取組 名称

「アートフラワー教室」

取組の概要

震災によって埼玉県に避難してきた被災者が月2回集う「さいがい・つながりカフェ」の中で、アートフラワー教室を開催し、クリスマスリースを制作しました。カフェでは毎回お昼ご飯を食べ、おしゃべりや歌などを楽しんできましたが、新型コロナウイルスの影響で活動の制限が生まれたため、家に籠りがちな状況の中で、被災者の孤立を予防し、元気を取り戻せる取組を行いました。

■取組の様子

当団体は、平成23年9月に埼玉県に避難した被災者支援にかかわったボランティアが、避難者の孤立を防ぎ、安心して過ごせる居場所づくりが必要であるという考えのもと、埼玉県男女共同参画推進センターの協力を得て設立され、令和2年6月に私たち避難者が代表となり、引き継がれました。

「さいがい・つながりカフェ」の一環として開催されたアートフラワー教室には、福島市、南相馬市、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、岩手県、宮城県からの被災者と埼玉県、東京都在住の方が参加されました。

同じ花材を使ってもそれぞれのセンスが生かされた色鮮やかなリースができあがりました。講師の指導を受けながら、参加者同士でも教え合い、和気あいあいとした雰囲気の会となりました。ひとりひとりが感想を述べあうことで会話も弾み、活気にあふれていました。

被災者同士や避難先の地域の方々との交流が図られ、コミュニティの再構築を行うことができました。今後も県外にでている被災者の方々との積極的な交流の機会を持っていきます。

■実施者の声

新型コロナウイルスの影響もあり思うような交流をはかることができずにいましたが、今回の取組を通じて再び被災者同士が顔を合わせ、声を聞くことができ、安心することができました。避難先では会話ができる相手も少ないことから、多くの方が「さいがい・つながりカフェ」への参加を楽しみにされています。今後も気兼ねなくつながりあえるコミュニティを継続していきます。

■参加者の声

「二年ぶりの再会で高校の同級生に会うことができました」「久しぶりに夢中になつものづくりをしました。時間を忘れるほど楽しいひと時となりました」「おしゃべりしながら楽しく参加できました」「皆さんと一緒にリースをつくることができて楽しかったです」

